

## 九州におけるキリスト教の伝播

—とくに文献紹介を中心に—

坂 井 信 生

The Propagation of Christianity in Kyushu

—An Overview with Literature Introduction—

Nobuo Sakai

This paper is based on the presentation given at the first conference of the project titled “The Acceptance of Christianity in Kyushu” held at Seinan Gakuin University on September 3rd, 2005. It deals with a brief history of Christian propagation in Kyushu divided into four sections such as “Kirishitan”, Catholic, Orthodox and Protestant churches, and introduces relevant literature.

### はじめに

只今ご紹介いただいた活水女子大学の坂井である。

先日、塩野教授から「九州におけるキリスト教の受容」という研究プロジェクトの参加が求められ、幾許かの関心から簡単にお引受けした。ところが、今日の第1回研究会で九州のキリスト教に関する「総括的」な報告をとの依頼を受け、はじめて事の重大さに気付いたという次第である。

私の本来の専門領域は宗教社会学であり、具体的にはアメリカのアーミシュ<sup>①</sup>やハッターライト<sup>②</sup>、メキシコのメノニータス<sup>③</sup>といった宗教的小集団、つまりセクト型宗教集団研究<sup>④</sup>に携わってきた。と同時に、学生・院生の調査実習を兼ねて地元九州の宗教集団、たとえばカクレキリシタン<sup>⑤</sup>やキリシタン系カトリック<sup>⑥</sup>、さらには新宗教集団<sup>⑦</sup>の調査も実施した。しかし、この10年程とくに九州大学を定年退官して活水女子大学に勤務するようになって以降、長崎を中心としたキリスト教への関心からささやかな研究を試みているにすぎない<sup>⑧</sup>。このプロジェクトへの参加でいくらかでもこの研究が進展することを願って、塩野教授のお誘いに応じたわけである。この意味からすれば、「九州におけるキリスト教の受容」という大きなテーマを「総括的」にお話する資格など持ち合わせていないひとりの「素人」にすぎない。まず、今日の私の報告はこうした素人によるものであることをご承知おき願いたい。

さて、このプロジェクトのテーマは「九州におけるキリスト教の受容」である。しかるに、「受容」(acceptance)の前提として、当然のことながら「伝播」(propagation)がなくてはならない。伝播あっての受容だからである。本プロジェクトが「キリスト教の受容」となっているのは、伝播を前提としての受容、伝播あっての受容を意味しているのは当然のことであろう。

ところで、本プロジェクトに参加の先生方のご専門を拝見すると、キリスト教史、日本近代史、社会福祉、中国思想、教育、図像学等々と多岐にわたっている。これらの先生方がそれぞれの専門

のお立場から、具体的にこのテーマのどのような側面を取り上げようとしておられるのか、私には見当がつかない現状である。

したがって、ここでの私の発表はとくに九州を舞台に展開されたキリスト教が、どのようなプロセスで伝えられたのか、といった伝播、キリスト教的立場からいえば「伝道」(evangelization)のすがたを簡単にのべ、もちろんそのすべてを網羅することは不可能であるが、それに関連する文献を紹介することで私の責を果たしたいと思う。それぞれの先生方がその専門分野でのキリスト教「受容」の問題を考察されるに際して、こうした文献が何らかのかたちで参考になればとの思いからである。

## I 日本におけるキリスト教伝道の概観

はじめに、日本においてどのようにキリスト教が伝播・伝道されたか、についてのあらましをのべることにしたい。

日本に伝えられた最初のキリスト教は「景教」である、との説がある。413年エフェソス公会議で異端とされたネストリウス派の東方伝道で中国に伝えられ、唐と元の時代に拡まった景教が、聖武期に日本にも伝えられたというのである。しかし、それがどのように日本で説かれ、またいかなる影響をもたらしたかに関してはほとんど知られていない<sup>⑨</sup>。

一般にひろく受け入れられているキリスト教の伝来は、1549年イエズス会士フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸したことに由来する。かれは鹿児島・平戸・山口そして豊後府内で伝道し、2年余の滞日でゴアに帰った。この間、かれは2千人余りの日本人に洗礼を授けたといわれている。

その後、イエズス会のみならずフランシスコ会、ドミニコ会といったカトリック修道会士が続々と来日し各地で伝道に当たった。豊臣秀吉は当初宣教師を優遇しているが、1587年に筑前筥崎で「日本は神国たる処」にはじまる『伴天連追放令』を発し、また1596年には長崎において26名の宣教師・信徒(いわゆる26聖人)を処刑する事件が生じている。しかしながら、全国的規模での弾圧・迫害はいまだ生じていない。

徳川幕府成立後、しばらくはキリシタン信徒の増加傾向は続いている。大村純忠などの大名が改宗することで、領民の集団改宗が各地でみられ、50万から70万と推定される信徒が存在したといわれる。しかし、幕府による統一政権の確立が進むにともない、思想上の統一、経済力の強化、欧州列国による植民地化阻止などの目的でキリシタンは禁制となり、鎖国が実施されたのち、キリシタンは激しい弾圧・迫害の対象となり、やがて信徒はほとんど根絶されてしまうのである。

幕末のペリーの来航により、幕府は1854年アメリカをはじめとする欧米諸国と『和親条約』を、さらには58年『修好通商条約』を締結、鎖国を解いて欧米諸国と外交・通商を再開することとなった。この『修好条約』には、たとえば『日米修好条約』に「日本に在るアメリカ人自らその宗法を念じ礼拝堂を居留地に置き障りなし」(第8条)と明記されているように、居留地の外国人の宗教生活を認め、教会堂建設すら容認しているのである。かくして、次々と宣教師が来日し、1862年には長崎東山手にプロテスタント教会、横浜にカトリック天主堂が、ついで65年には長崎に大浦天主堂が建立されるのである。もちろん、日本人にはきびしい禁教令が依然として課せられていた。

禁教令下にもかかわらず、こうした宣教師のもとにのちのキリシタン信徒の子孫がすがたを現すことになる。大浦天主堂における「旧信徒の発見」であり、その結果が「浦上四番崩れ」の悲劇

である。そして、やがて「キリシタン禁制」の高札が撤廃される1873年を迎えるのである。このことにより、日本における「信教の自由」がともかくも一応認められることになる。形式的とはいえ、この禁教令撤廃の意義は大きいというべきである。この年以降、カトリック教会、ロシア正教会そしてプロテスタント諸教派による伝道、いわばキリスト教の伝播が本格的に開始されるのである。

以上、簡単にのべてきた日本全体におけるキリスト教の動向に関する文献として、次のようなものをあげることができよう。(a)日本キリスト教史、(b)キリシタン史をふくむカトリック史、(c)ハリストス(ロシア)正教会史、(d)プロテスタント史、と分って紹介したい。こうした文献の中に、九州におけるキリスト教伝播に関し記述した個所を散見することができるであろう。

- (a) 比屋根安定『日本基督教史』教文館 1949  
 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局 1970  
 五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館 1990  
 Otis Cary, *A History of Christianity in Japan*, Charles Tuttle, 1976〈復刻版〉  
 『日本キリスト教歴史大事典』教文館 1988
- (b) アルベール・井上郁二訳『聖フランシスコ・ザビエル書翰抄』岩波書店 1949  
 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社 1985  
 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』平凡社 1988  
 パジェス(吉田小五郎訳)『日本切支丹宗門史』岩波書店 1960  
 ラウレス『日本カトリック教会史』中央出版社 1956  
 海老沢有道『切支丹史の研究』新人物往来社 1971  
 チースリク『キリシタン史考』聖母の騎士社 1995  
 助野健太郎『キリシタンの信仰生活』中央出版社 1957  
 村上直次郎(訳)『イエズス会日本通信』雄松堂 1968  
 村上直次郎(訳)『イエズス会日本年報』雄松堂 1969  
 松田毅一(監訳)『16-17世紀イエズス会日本報告書』同朋会出版 1987  
 フロイス(柳谷武夫訳)『日本史』平凡社 1963  
 フロイス(松田毅一他訳)『日本史』中央公論社 1979  
 海老沢有道『切支丹の社会活動及南蛮医学』富山房 1979  
 田村仲義『南蛮文化の受容』関西図書出版 1982  
 海老沢有道他(編)『キリシタン書・排耶論』岩波書店 1970  
 『カトリック大辞典』富山房 1966  
 『新カトリック大事典』研究社 1996
- (c) 牛丸康夫『日本正教史』日本ハリストス正教会 1978  
 ニコライ(中村健之介訳編)『明治のハリストス正教会』教文館 1993  
 アレクセイ・ポタポフ『明治期日本の文化における東方正教会の位置および影響』日本ハリストス正教会教団東京大主教教区宗務局 2004
- (d) 小沢三郎『日本プロテスタント史研究』東海大学出版会 1964  
 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社 1980

## Ⅱ 九州におけるカトリック

### 1. キリシタン

日本におけるキリスト教伝道史を概観した上で、舞台を九州に限定し、九州におけるキリスト教伝播のあらましをみていくことにする。まず、九州におけるカトリックの中でもキリシタンの動向からはじめよう。

先述のように、ザビエルが1549年鹿児島に到来しキリスト教を伝えたのが日本での最初のキリスト教伝播であるが、このことは同時に九州におけるキリスト教伝播の最初でもある。かれはマラッカでアンジロウ（ヤジロウ）なる薩摩出身の聡明な日本人と運命的な出会いをし、日本伝道を志すのである。薩摩の島津貴久の許可をえて伝道をはじめますが、貿易上の利益も期待ほどでなく、また仏教側の反感もあり、ザビエル一行に好意的でなく、というより伝道を禁じたために平戸に移った。平戸でも領主松浦隆信は貿易上の利益を考慮してかれらを歓迎する。しかし、仏教側の反撥やポルトガル船員と町民との刃傷事件（宮の前事件）もあり、宣教師の追放をはかった。

他方、ザビエルは日本伝道の公許を得るために京都に上る計画をたて、博多を経由して上洛する。したがって、博多の地を踏んだ最初のキリスト教徒はザビエルということになる。戦乱で荒れ果てた京都では、ザビエルは天皇にも将軍にも謁することができず、やむなく西下、山口そして豊後府内で伝道しゴアに帰るのである。

平戸では松浦氏の重臣籠手田安経と一部勘解由が改宗、平戸島西岸と生月島にキリシタン宗団が形成された。今日でも、生月島はカクレキリシタンの島として知られている。平戸から宣教師が追放され、ポルトガル船の入港が差止められたために、大村領横瀬浦が次の貿易港として注目され、領主大村純忠は入港のみならず宣教師に土地を与えて伝道を許可した。1563年純忠自信も洗礼を受けるにおよび、横瀬浦はやがてキリシタンの中心の観をすら呈するにいたる。しかし、ここでも家臣団による反乱が生じ、横瀬浦の町と教会は灰燼に帰した。

横瀬浦について貿易港となるのが福田であるが、直接外海に面しており良港とはいえず、長崎が新たな港として脚光をあび、大村純忠がこの長崎をイエズス会に寄進したのを機に、キリシタンの町として多くの教会が建てられ、コレジオ、セミナリオさらには印刷所も設けられ、やがて日本のキリシタンの中心地となるのである。1587年にはカトリック教会の日本司教区が設定され、初代司教モラレスは来日途上病死するが、96年第2代司教ペトロ・マルチネスが長崎に着座した。各地からの来住者も増加し、およそ5万の町民を数える長崎に発展するが、その大部分はキリシタンであったといわれている。

キリシタンが島原半島に伝えられたのは、1562年有馬義直（のちの義貞）が実弟の大村純忠を通して宣教師派遣を依頼したことにはじまる。貿易上の利益を考慮してのことと思われる。布教長トルレスの令でアルメイダが口ノ津で伝道を開始する。上述の横瀬浦の焼打ちという事情から、口ノ津が西九州伝道の中心地となった。さらに、義直の受洗について家臣・領民の集団改宗もあり、ほどなく2万のキリシタンを数えるに至ったという。のちに、これら島原の領民たちは、当時の領主松倉重政の圧政・重課税に耐えかねて、いわゆる「島原の乱」を招くことになる。本来的には重政の圧政が原因の農民一揆といえるが、徳川幕府はこれをキリシタン信徒による武力反乱とみなし、キリシタン禁制の強化あるいは鎖国の口実としたことはよく知られている。

ともあれ、今日の長崎県下におけるキリシタン伝道は、港湾および貿易と強い関連をもつといえ

る。イエズス会がポルトガル貿易船と結ばれており、港町を拠点にかれらは伝道したのであり、その場合貿易上の利益が領主の主たる関心をひいたのである。もちろん、かれらの中にも真剣に信仰を求め、大村純忠のように洗礼を受ける者も増え、イエズス会の伝道は大きく展開するのである。

この間、九州の各地に宣教師が派遣され教会が設立された。豊後ではザビエルを招いた大友義鎮（宗麟）の入信により教会を一層保護した。とくに豊後と深い関係をもつ宣教師はアルメイダで、病院や育児院を建てている。豊後では朽綱、由布院、竹田、臼杵にも教会が設立され、とくに朽綱は日本における8つの布教所（府内、平戸、博多、鹿児島、山口、京都）のひとつに数えられている。

博多では黒田孝高（如水）が高山右近の感化で受洗、キリシタンの有力な後援者・保護者となった。博多の教会は筑前のみならず、筑後、豊前、豊後といった隣接する国々からの信徒が集い、キリシタンの「中央基地」の観をすら呈した。チースリクは「慶長年間に博多で授けた成人洗礼は約5千」で、「博多とその教会の管轄に居たキリシタンは7千」と推定している。<sup>⑩</sup>

肥前佐賀では竜造寺隆信存命中キリシタン伝道はされておらず、1590年巡察使ヴァリニアーノが京都に赴く途中、鍋島直茂・勝茂父子に迎え入れられ、その折家臣数名が受洗したと伝えられている。また、1608年ドミニコ会士が鹿児島と佐賀に、12年にイエズス会士も佐賀に教会を建立したというが、詳細は明らかでない。

はじめて熊本の地を訪れたのは、やはりアルメイダで1563年のことである。南肥後が小西行長の所領となった1588年宇土、八代などに教会が建てられたが、関ヶ原の役後法華宗徒として知られる加藤清正領となつてのちは弾圧が加えられ、むしろ法華宗を領民に強要したという。天草には同じくアルメイダが伝道、下天草領主志岐麟泉一族が受洗、領内の伝道につとめ、『伴天連追放令』に際しては宣教師をかくまうなど、天草はキリシタンの有力な避難所（アジール）となった。天草が行長の支配下に入ると、その庇護のもとにキリシタンの一大中心地となり、コレジオが開設されるなどキリシタン文化が栄えた。

鹿児島のキリシタン史はザビエルにはじまるが、当初好意的であった島津氏が仏教側の反撥もあり伝道を禁じたために、ザビエルは平戸に去った。その後の1561年アルメイダがこの地に入り伝道活動をしている。関ヶ原の役後、小西行長の家臣ディオゴ美作とその家来約千人が川内に避難してきたことから、鹿児島の教会は強化されてはいるが、1608年以降弾圧が生じてこの地のキリシタンは消滅したといわれている。

日向の場合、伊東一族が島津に侵攻されたために豊後の大友を頼って身を寄せたことから、臼杵のノビジャードの修練長をしていたラモンより一族のほとんどが受洗した。この中には天正遣欧少年使節のひとりに選ばれた伊東マンショも含まれている。のちに伊東家は日向に帰り飢肥領主となり、ここに伊東家のかつての家臣を中心にキリシタン宗団が形成されるが、禁教令以後は崩壊している。

以上が九州におけるキリシタンの動向のおよそのすがたである。しかし、日本のキリシタンの中心ともいえる九州のキリシタン史であるが、今日いまだ一冊の概観書も存在していないというのが実情である。ただ、パチェコの『九州キリシタン史研究』があるにはあるが、若干の問題を取上げているのみで、タイトルから予想される九州全体を網羅したキリシタン史ではない。あえていえば、片岡らによる『切支丹風土記・九州篇』が九州各地のキリシタン史を扱っていることから、九

州キリシタン史の概観書といえなくもない。

しかし九州はキリシタンの中心地であったがゆえに、多くの文献にそれは記述されている。たとえば、『イエズス会通信』、パジェスの『日本切支丹宗門史』、さらにはフロイスの『日本史』などには、九州関連の記述が多く散見される。とくに中央公論社版『日本史』は地域別に配列・編集が試みられ、全12巻のうち6～8巻が「豊後篇」、9～12巻が「西九州篇」となっており、参考にするのに便利ともいえよう。また、訳者による詳細な註記はいたって有益である。

他方、特定の地域に限定されたキリシタン史は多くみることができる。たとえば、浦川による五島や浦上、片岡の長崎のキリシタン、茂野の南日本、北野の天草、加藤の大分のものなどがある。助野の『島原の乱』も労作といえよう。チースリクやラウレスの筑前、筑後、博多、秋月のキリシタン史は得がたい論考である。また、各地に多大の功績を残したアルメイダに関しては東野のものがある。その他のちのべる各教会史には、多くの場合、その地におけるキリシタン史が略述されている。『佐賀カトリック教会史』には佐賀の、大分教会の『一粒の麦地に落ちて』には豊後大分のそれを見ることができるといった具合である。

片岡弥吉『切支丹風土記・九州篇』宝文館 1960

パチェコ『九州キリシタン史研究』キリシタン文化研究会 1977

浦川和三郎『浦上切支丹史』全国書房 1945

浦川和三郎『五島キリシタン史』図書刊行会 1973

片岡弥吉『長崎のキリシタン』聖母の騎士社 1989

北野典夫『天草キリシタン史』葦書房 1987

茂野幽考『南日本切支丹史』図書刊行会 1976

結城了悟『鹿児島島のキリシタン』春苑堂書店 1987

加藤知弘『ザビエルの見た大分』葦書房 1985

加藤知弘『バテレンと宗麟の時代』石風社 1996

ラウレス「筑前筑後のキリシタン」『キリシタン研究』第6輯 1961

チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」『同上』第19輯 1979

チースリク『秋月のキリシタン』教文館 2000

助野健太郎『島原の乱』東出版 1967

東野利夫『南蛮医アルメイダ』柏書房 1993

## 2. カトリック

近代日本の幕明けが、1853年ペリー提督率いるアメリカ東インド艦隊、いわゆる黒船の来航を機とすることは周知のことであろう。翌年『日米和親条約』をはじめとして、英・蘭・仏・露といった諸国とも和親条約を締結、ついで58年これら諸国と『修好通商条約』を締結したのである。

この条約にはアメリカ総領事ハリスが、「今こそ、日本人がキリスト教に対して加えた残虐な迫害に一撃が加えられる」という<sup>④</sup>ように、キリスト教にとり有利な条項がふくまれていた。すなわち、居留外国人が自らの宗教信仰を守りかつ居留地に教会建設を認めるといった条項である。かくして、表面的には在留自国民の宗教生活を援助するとの名目で、キリスト教各教派宣教師が続々と来日することになるのである。

## (1) カトリックの日本伝道

カトリック教会は日本の教会再興を一時も忘れることはなかった。カトリック教会長年の悲願であった日本伝道の再開は、パリ外国宣教会に委託されていた。この宣教会は1664年設立が認可され、教皇庁布教聖省とフランス政府支援のもと、とくに東アジア地域の伝道を担当していた。

宣教会の日本伝道の第一歩として、1844年マカオにいたフォルカードの派遣を決め、フランス艦で琉球の那覇に到着した。教皇ユリウス16世は1846年琉球をふくむ日本に代牧区を設定し、翌年フォルカードを初代日本代牧に任命した。かれに続いて宣教会士は次々と琉球にいたり、日本伝道再開にそなえて日本語学習を重ねた。その中にはのちにのべるプチジャンもふくまれている。

条約締結による開港にともない、長崎をふくむ開港地には外国人が上陸、居留が可能となった。病のため帰仏したフォルカードに代わって日本代牧に叙されたジラルは、1859年初代駐日フランス領事ベルクールとともに江戸に到着、ここに徳川家康による「キリシタン禁制」以来はじめて、カトリック宣教師が公然と江戸の地を踏んだのである。そして、条約ののっとり1862年横浜天主堂が、65年には大浦天主堂が竣工する。この時の大浦天主堂の主任司祭はプチジャンであり、66年第3代日本代牧に叙される。この前年の65年にいわゆる「キリシタン信徒の発見」あるいは「キリシタンの復活」といわれる出来事があり、続いて「浦上四番崩れ」の悲劇発生となるのである。

カトリック教会では日本における再伝道を効率的に行うために行政組織を整備確立するが、その組織の推移を示しておこう。

1846年 日本代牧区設定 フォルカード初代代牧

1859年 ジラル第2代代牧江戸に到着

1876年 日本代牧区、北日本と南日本に分割

1888年 南日本代牧区、中部代牧区（中国・四国）と南日本代牧区（九州）に分割

1891年 北日本代牧区、東京司教区と函館司教区に分割。中部代牧区は大阪司教区に、南日本代牧区は長崎司教区に変更。

文献としてはキリシタン復活に関して、古くは姉崎のもの、そして浦川の大著『キリシタンの復活』がある。浦川の本に参考として使用されたのがマルナスの『日本キリスト教復活史』である。『パリ外国宣教会年次報告』は、この会の琉球到着から1940年までの日本伝道の報告書であり、長崎のみでなく、九州をふくむ全国各地での動向が記されている。幕末から明治にかけてのキリシタン・カトリック関係文献として次のものをあげておこう。

姉崎正治『切支丹禁制の終末』同文社 1926

浦川和三郎『切支丹の復活』図書刊行会 1979

マルナス（久野桂一郎訳）『日本キリスト教復活史』みすず書房 1985

海老沢有道「筑後国御原郡今村の復活切支丹」『キリシタン研究』第18輯 1961

『信仰の道程 今村信徒発見125周年記念誌』今村カトリック教会 1992

村松菅和他訳『パリ外国宣教会年次報告』聖母の騎士社 1996

## (2) キリシタンの復活と浦上四番崩れ

1865年大浦天主堂が竣工、条約にしたがってフランス人を中心とする長崎居留外国人の司牧を担当した大浦教会に、まったく予期しない事態が生じた。長崎で「フランス寺」と呼ばれていた大浦天主堂に、この年ひそかにキリシタン信仰を保持し続けてきた浦上キリシタンの一群が訪れ、司祭

プチジャンに自らの信仰を告白したのである。「キリシタンの復活」そして「浦上四番崩れ」の端緒である。

キリシタンであると名乗り出たこれら旧信徒に対し、プチジャンたち宣教師は禁教令下のゆえに秘密裡に浦上に潜入し、司牧活動を開始する。浦上には4ヶ所の秘密礼拝所が設けられ、日本人に変装して大浦から出向き、教理を教え秘跡をさづけ、ミサをあげるなどの活動を続けた。もちろん、当局もこの動きを察知していた。こうした中で、浦上四番崩れが生じるのである。教会に復帰した信徒は幕府の対キリシタン政策の柱のひとつの寺請制度を否定し、檀那寺である聖徳寺に無届けの自葬を敢行した。これを機に浦上信徒の存在が表面化し、まず指導的信徒68名が捕縛された。1867年のことである。

翌1868年徳川幕府が倒れて明治維新政府が樹立された。新政府は神道国家主義にもとづく思想統制の必要から、従来のキリシタン政策が踏襲された。というより、一層きびしさを増す弾圧策が講じられた。この方策のため、翌1869年には浦上信徒およそ3,300人が西国20藩に総流配されたのである。いわゆる「浦上四番崩れ」がこれである。この苛酷な処置に対して、欧米諸国の在日外交団が一致して日本政府に厳重な抗議をくり返したのは当然である。また、1871年出発の岩倉具視らの遣欧使節団が訪れた国々で、政府の宗教政策に対するきびしい非難に直面している。かくて、1873年「キリシタン禁制」の高札撤廃の日を迎えることになるのである。

この「キリシタンの復活」に続く「浦上四番崩れ」は数多くの文献の中に取上げられている。たとえば、姉崎、浦川、マルナスなど前項に掲げたものにもこの問題・事件は記述されている。直接的に取り扱ったものとしては片岡や家近のものがある。また、この事件の最中に司教の任にあったプチジャンに関しては江口が詳細に取上げている。

片岡弥吉『浦上四番崩れ』筑摩書房 1963

家近良樹『浦上キリシタン流配事件』吉川弘文館 1998

江口源一『キリシタン復活の父プチジャン司教』カトリック大明寺教会 1970

『プチジャン司教書簡集』純心女子短期大学 1970

### (3) 九州のカトリック

九州のカトリック教会は当初長崎司教区に統轄されて長崎司教のもとにあったが、各地に教会が設立されるにともない、下表のように分割されている。とはいえ、九州のカトリックの中核は長崎である。今日、九州全体の巡回教会をふくむ小教区教会は313であるのに対し、長崎は130教会、41.5%を占めている。信徒数にいたっては、九州全体の119,368名に対し、67,266名、56.4%と半数以上である。詳細は『カトペディア』(2004年度版)を参照されたい。

以下、九州各地におけるカトリック教会の伝道のすがたを簡単に記しておこう。

福岡県で最初のカトリック教会は、潜伏キリシタンが復活した今村教会である。福岡市では1887年、ラゲ訳聖書で知られるラゲの伝道にはじまる。この時、福岡鎮台に長崎出身の信徒が数名いたのみで、かつてのキリシタンの末裔はまったく存在しなかったという。興味深いのは、上五島の信徒が大正末期に行橋に集団移住し、1930年に新田原教会を創設したことである。

佐賀では1861年頃、長崎外海地方のキリシタンが移住した馬渡島教会が最初であり、1881年に聖堂を建てた。佐賀市には1889年久留米からソーレが伝道に当たっている。熊本では1873年長崎神の島の信徒伝道士が天草大江を訪れたのを機にキリシタンの復活が続き、コールが巡回して司教を担



当した。筑後今村と同様の事例である。天草では大江を中心に50年近く活躍したガルニエが知られている。熊本市伝道もコールにより開始され、さらに八代、人吉へと拡大されている。

大分では長崎の旧信徒発見に刺激され、かつて信徒が多かったと伝えられていた大分に1882年フレノが伝道を開始した。しかし、福岡と同じくキリシタンの子孫はいなかったという。ラゲも大分にかかわり、宮崎にも伝道を試みている。かれは1892年延岡、高千穂、宮崎に信徒共同体が成立、宮崎に宣教師館が建てられたことを報告している。鹿児島にはフェリエが伝道に当り、1891年宣教会名義で土地を入手、教会堂を建てた。のちに鹿児島を担当したラゲは当時の七高の小野藤太などの協力をえて、新約聖書の翻訳をしたことも知られている。

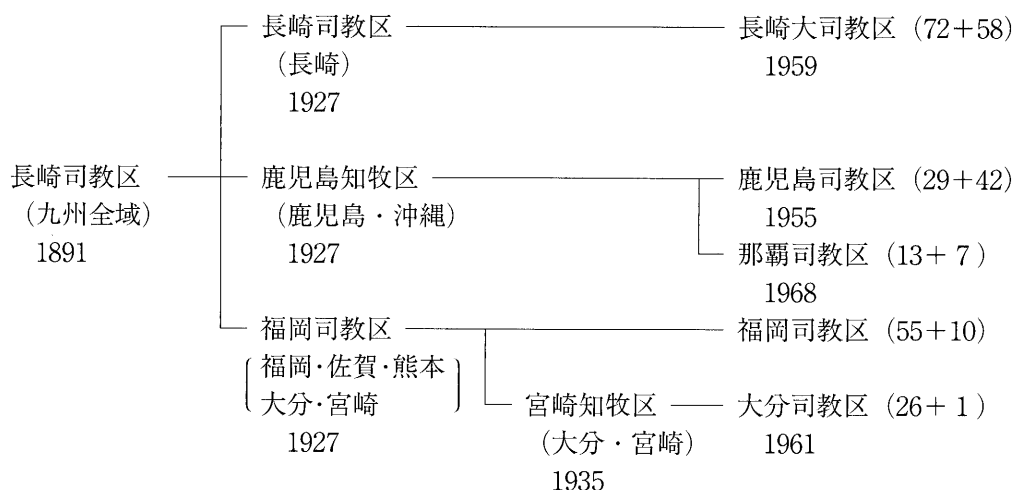
ここで、九州におけるカトリックの神学教育についても簡単に言及しておこう。

「キリシタンの復活」が現実のものとなり、かれらに対する司牧の必要性を痛感した宣教師が直面した緊急課題は、日本人伝道者と司祭養成にはかならなかった。「外国人遊歩規定」により極端な旅行制限が加えられ、かつ僅か数名の宣教師による十分な司牧は不可能であったからである。まず、水方といったキリシタン組織の指導者をひそかに集め、簡単な教理指導ができる信徒伝道士養成を試みた。この方策はのちに「伝道学校」と呼ばれて各地に設立された。

その一方で、プチジャンたちは復活した信徒の中から3名の少年を選抜、大浦の司祭館に住まわせ、初歩的な神学教育を開始した。しかし、弾圧が激しさを増したことから、十数名にふえた神学生を安全なペナン島のパリ外国宣教会神学校へひそかに送り出した。1875年大浦に長崎公教神学校（通称羅典神学校）が設立されるにおよび、ここで本格的な神学教育が実施された。つねに40～50名の神学生が在学したという。

多くの司祭養成に貢献した長崎公教神学校ではあったが、第2次大戦中に変化が生じ、司祭志願者養成の小神学校として存続、戦後は福岡に設立されたサン・スルピス大神学院が、本格的な司祭養成の神学教育を行っている。

#### 九州におけるカトリック教会組織の推移図



(右側の数字は、小教区教会+巡回教会数)

文献に関していえば、九州全体を取り扱った九州カトリック教会史はいまだ存在しない。高木の中にいくつかの九州関係の論考をみることができる。教区史としては、長崎大司教区が教区史を2

度公にしている。筆者の知る限り、福岡と那覇司教区が教区史を出版している。他にあるかも知れない。各個教会史は長崎の大浦、浦上、中町、紐差、福岡の大名町、大分教会など数多く公刊されている。また、修道会やカトリック学校でも、それぞれの歴史を公にしている。

- 高木一雄『明治カトリック教会史』キリシタン研究会 1978  
 『長崎大司教区のあゆみ』カトリック長崎大司教区 1965  
 『旅する教会 長崎邦人司教区創設50年史』同上 1977  
 『長崎の教会』同上 司牧企画室 1989  
 『カトリック大浦教会百年のあゆみ』同教会 1965  
 『神の家族400年 浦上小教区沿革史』カトリック浦上教会 1983  
 『中町小教区90年記念誌』カトリック中町教会 1986  
 『萌芽 福岡教区50年の歩み』カトリック福岡教区 1978  
 『大名町教会百年史』カトリック大名町教会 1986  
 『信仰の道程 今村信徒発見125周年記念誌』カトリック今村教会 1992  
 『45年の歩み』新田原カトリック教会 1975  
 『旅する久留米教会』久留米カトリック教会 1978  
 『佐賀カトリック教会史』同教会 1984  
 『一粒の麦地に落ちて 創立百周年記念誌』大分カトリック教会 1987  
 中島政利『福音伝道者の苗床 長崎公教神学校史』聖母の騎士社 1977  
 『途杖100年』幼きイエズス会日本管区 1977  
 『礎 お告げのマリア修道会史』同修道会 1997  
 『マリア会日本管区100年の歩み』同会日本管区 1999  
 『海星百年史』海星学園 1993  
 『カトペディア』(2004年度版)カトリック中央協議会 2004

### 3. カクレキリシタン

カクレキリシタンに関しては、ここにご出席の多くの方々も興味をもたれていることだろう。私自身40数年前に古野教授の助手として調査に同行した経験があり、20年ほど前には生月の調査を行った。

明治以降、長崎県下の多くの潜伏キリシタンが教会への復帰を果たしたことはすでにのべた。しかし、一部の人々は父祖伝来のキリシタンに固執して、教会への復帰を拒み続けている。こうした人々を今日「カクレキリシタン」と呼ぶことは周知であろう。かつてはキリシタンであったとしても、厳格に実施された禁教令と寺請制度のゆえに仏教徒を装っている中に、仏教のみならず神道や民間信仰などと習合し、カトリック的一神教のすがたを失った特異な宗教体系が形成されたのである。

カクレキリシタンに関する研究は、まず昭和初期から田北が手がけ、古野、片岡、最近では宮崎<sup>®</sup>がかかわっている。かつては五島、外海、平戸など長崎県下にひろくみられたが、近年の急速な衰退傾向から早急な調査が望まれており、長崎県教育委員会の調査報告はそれに応えているといえよう。

- 田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会 1954

古野清人『隠れキリシタン』至文堂 1959

片岡弥吉『かくれキリシタン』日本放送出版協会 1967

宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会 1996

宮崎賢太郎『カクレキリシタン』長崎新聞社 2001

『長崎県下のカクレキリシタン—長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告』長崎県教育委員会  
1999

### Ⅲ 九州におけるハリストス正教会<sup>®</sup>

ハリストス正教会（ロシア正教会）の日本伝道は、1861年函館のロシア領事館付司祭としてニコライが着任したことにはじまる。新島七五三太（襄）がこの地でニコライの日本語教師をつとめ、かれから英語や世界情勢を学んだことはよく知られている。ニコライは1872年日本伝道の中心を東京に移し積極的な伝道活動を開始した。かれの書簡によると、函館、大阪そして長崎にも宣教団の建物を建てて伝道の拠点とする希望をもっていたが、資金不足のため長崎では実現していない。正教会はキリスト教他教派と比較して宣教師の数は格段に少数であったが、「伝道学校」という短期の神学教育を受けた伝教者の働きで、日本人信徒を多数獲得しており、1880年には12,500名、1898年には25,000名をこえる信徒数で、カトリック教会につぐ教勢を示している。

さて、九州におけるハリストス正教会の動向に移ろう。早くも1872年に伝教者が鹿児島で伝道したとの説がある。函館ですでに受洗者が出ているとはいえ、この年にニコライが伝道拠点として東京に進出したばかりであり、いまだ禁教令下にあることから、必ずしもこの説に同意し難い。しかし記録によると、正教会の九州伝道の第一歩が鹿児島であることは間違いない。大阪教会司祭高屋仲管轄のもと、西南戦争直後の1878年小野莊五郎が選ばれて鹿児島に赴任、伝道が開始されている。のちに高屋自身鹿児島に着任し聖堂を建てた。今日の鹿児島ハリストス正教会の草創期である。ロシア文学者として著名な昇曙夢は高屋より受洗、正教神学校を終えたのちロシア文学研究の道に入っている。

熊本には高屋が1879年訪れて以来正教会の伝道が続けられ、83年に坪井町に聖堂が建てられた。人吉では大阪で入信した一信徒が帰郷して伝道、1884年小杉雅枝伝教者により聖堂が建てられた。福岡では1881年河野周造が久留米ついで柳川、さらには福岡、北九州に伝道している。この年福岡市天神に正教会講義所も設けられた。

長崎における正教会の動きは、1882年高屋の管轄で小島ルカが派遣され、ニコライ永眠時の1912年に49名の日本人信徒のいたことが伝えられているが、詳細は不明である。他方、長崎のロシア領事館では在留するロシア人が増加したこと、およびロシア東洋艦隊の冬期避寒港としてロシア艦船の在港が頻繁であったことから、領事館附属聖堂が建立された。1887年のことである。日露戦争後、長崎残留ロシア人の請願もあってニコライは高井万亀尾を長崎に派遣した。かれは帰国を待つロシア兵捕虜、さらにはロシア革命により亡命してきたロシア人のための聖務を行った。同時に、かれは九州の各地の正教信徒のための司牧につとめた。この聖堂は第二次大戦中軍により強制立退きとなり、西山に換地をえて聖堂を建てたが原爆で焼失、高井神父一家は長崎を離れた。

1891年ニコライは九州各地を巡回し説教会を開催している。これとともに、伝教者が派遣され、正確な数字は不明であるが、かなりの数の信徒をえている。たとえば宮崎県では、宮崎52、飢肥22、

都城17, 延岡11といった報告がある。しかしながら, 日露戦争, そしてロシア革命といった歴史的  
事件による日本とロシアとの関係悪化にともない, ロシア正教会と日本の教会との関係もほとんど  
断絶するなどの影響もあり, 正教会の教勢は減退, とくに九州ではその傾向が著しくみられた。

今日のハリストス正教会は全国で57教会, 2万6千の信徒数であるが, 九州には僅か熊本, 人吉,  
鹿児島のみであり, 信徒数も百名前後にすぎない。しかし, 潜在的信徒がかなり九州に散  
在していることから, 九州で唯一の神父, 人吉の及川信は3教会司牧の傍ら, 信徒発掘のため  
九州各地の巡回につとめているという。なお, 日本ハリストス正教会は東北・北海道の東日本主教  
教区, 東京・関東一円の東京大主教教区, 関西以西の西日本主教教区に分かれており, 九州は西日  
本主教教区に属し, 宗務局は京都ハリストス正教会に置かれている。文献に関してはすでに記した  
(I(c))。

#### IV 九州におけるプロテスタント<sup>⑧</sup>

##### 1. プロテスタント宣教師の来日

日本におけるプロテスタントの歴史は, カトリックのザビエル来日に遅れること310年, 1859年  
『日米修好通商条約』にもとづき外国人の日本居留が認められたことにより, 自国民の宗教生活の  
援助を目的にアメリカ人宣教師が来日したことにはじまる。最初に来日したのは監督教会のウィリ  
アムスとリギンスであり, 1859年長崎に上陸した。ついで長老教会のヘボン, オランダ改革派教会  
のブラウンが神奈川に, そしてフルベッキが長崎に到来した。その後も各教派宣教師の来日は続く  
ことになるのである。

このように, 幕末から明治初年にかけて来日した宣教師は, 神奈川, 兵庫, 函館, 長崎の居留地  
に滞在して, その活動を開始するのである。とはいえ, いまだキリスト教禁制の高札は撤廃されて  
おらず, とりわけ長崎では「浦上四番崩れ」の悲劇が生じるということもあり, かれら本来の活動  
とは異なる英語教育をはじめとする他の分野での活動に限定されざるを得なかった。

長崎にはウィリアムス, リギンス, フルベッキに続いて, イギリス教会伝道協会 (Church Missionary  
Society, 以下CMSと略す) からエンソール, バーンサイド, モンドレルが着任, 1869年東京に移っ  
たフルベッキに代わってスタウトが, ついでメソジスト派のデヴィソンが来崎した。これら宣教師  
は禁教令下にあつて積極的な伝道活動は不可能であったが, 「手を束ねて何の為す所無し」という  
訳ではなく, 「準備的の働きは我等の為に多々有之候」とウィリアムスがいうように<sup>⑨</sup>, 禁教令が解  
かれて本格的伝道が可能になる来るべき日に備えての準備, 可能な限りの間接伝道の方策を試みて  
いる。その具体的なすがたは次のように要約することができよう。

##### (1) 居留自国民のための牧会

条約にもとづき居留自国民の宗教生活の援助であり, このために1862年東山手居留地にプロテス  
タント教会 (English Church) が設立された。長崎居留の英語使用の人々のための合同教会であり,  
南山手の大浦天主堂に先立つこと2年余, 日本最初のプロテスタント教会である。

##### (2) 漢籍の輸入・販売

上海などの宣教団印刷所による漢訳聖書をはじめとする宗教書, 地歴書, 医学書など広範な分野  
の漢籍の輸入・販売を行っている。余りの繁忙さにのちには宗教書に限定したというが, かかる漢  
籍を通してキリスト教理解を求める文書伝道ということができよう。

## (3) 英語教育

宣教師の多くは請われて各種教育機関あるいは私塾で英語教師の役割を担っている。たとえばフルベッキはオランダ出身という好条件もあって、英語伝習所の後身済美館教師をつとめたし、エンソールは私塾を開き「各地からの英語学習者で私の手は一杯だ」とその盛況ぶりを伝えている。

## (4) 医療活動

長崎ではアメリカ監督教会派遣のシュミッドが診療活動を行い、キリスト教理解と親近感をうる伝道方策を試みた。また医学教育も実施したという。しかし、1年余で病いのため帰米を余儀なくされた。

## (5) 日本語学習と翻訳

宣教師は日本語学習にかなりの時間を割いている。ウィリアムスは「此国語は甚だ六ヶ敷して加うるに辞書も文法書も之無、教師も甚だ無頓着なれば日本語の進歩は遅々たらざるを得ず候」<sup>⑧</sup>と記している。この困難を克服してかれらは日本語を学び、ほどなく翻訳をすらはじめている。漢籍を読めない大多数の日本人のためであった。

## (6) 伝道活動

禁教令という制約下にありながらも、宣教師の伝道成果がまったくなかったわけではない。長崎における最初のプロテスタント受洗者は佐賀藩家老村田若狭とその弟綾部三左衛門であり、1886年フルベッキの授洗である。また、エンソールも禁教令下の1872年までに10名に授洗している。

ここで、明治期以降のプロテスタントの動向に関する文献のいくつかをあげておこう。ただし、これらは必ずしも九州を舞台にしたその動向を述べたものではないが、部分的に九州に関する記述をみることはできる。九州に直接関連した文献は次項で各教派別に紹介したい。

工藤英一『日本社会とプロテスタント伝道』日本基督教団出版部 1959

海老沢有道『明治変革期とキリスト教』新生社 1964

大浜徹也『明治キリスト教の研究』吉川弘文館 1979

杉井六郎『明治期キリスト教の研究』同期社 1984

高橋昌郎『明治のキリスト教』吉川弘文館 2003

元田作之進『日本基督教の黎明（老監督ウィリアムス伝記）』立教出版社 1970（復刻版）

フルベッキ（五十嵐喜和他訳）『日本プロテスタント伝道史』日本基督教会 1984

同志社大学人文科学研究所編『日本プロテスタント諸教派の研究』教文館 1997

森岡清美『明治キリスト教会形成と社会史』東京大学出版会 2005年

## 2. 九州における伝道活動

1873年宣教師待望のキリシタン禁制の高札が撤廃されるにおよび、長崎在住の宣教師は好機到来と喜び勇み、日本人対象の直接的な伝道活動を本格的に開始することになる。かれらの動向は、(1)市中に説教所そして教会の創設、(2)日本人伝道者養成の神学教育の開始、(3)伝道上の助けとなるキリスト教主義学校の設立、そして(4)長崎を拠点に九州各地への伝道、この4点に要約されよう。

禁教令撤廃時の1873年に長崎に滞在していた宣教師はイギリス教会のバーンサイド、オランダ改革派のスタウト、メソジスト派のデヴィソンである。まず、これら宣教師の動向を上の4点を中心にのべ、つぎに必ずしも長崎を拠点としていない教派（組合派、バプテスト派、ルーテル派）によ

る九州伝道についても概観することにしよう。

(1) イギリス教会（日本聖公会）

禁教令撤廃の日が近いとの判断から自宅でバイブルクラスを開いていたバーンサイドは、定期的出席者があり、また English Church への出席者の増加から、市中に説教所開設を試みる。ほどなく土地を入手して教会堂を建てた。1874年のことである。かれの後任モンドレルは東京でニコライを通して改宗した水科五郎の助力をえて、この新会堂で礼拝をもつのである。今日の日本聖公会長崎聖三一教会の草創期のすがたである。

モンドレルは1876年早くも伝道者養成クラス開設を計画、翌年校舎が竣工、「聖アンテレ神学校」として開校した。しかし、1884年大阪に神学校が創設されたのにともない、モンドレルの強硬な反対にもかかわらず、在校生は順次大阪に移り、1886年廃校となった。

バーンサイドは禁教令撤廃の年、早くも長崎に女子教育機関設立の提案を CMS 本部に行っている。CMS 側ではこれに応じ女性宣教師派遣を回答しているが、長崎県知事の拒否のゆえにかれは自宅で私塾を開設した。これをもとにモンドレルは1879年出島に「出島英和学校」を設立、この学校を「長崎で公的に開設された最初のキリスト教主義学校」と評している。しかし、この英和学校は存続期間僅か4年で廃校となった。今ひとつ、CMSの教育活動にグッドオールによる「長崎女学校」がある。伝道地からの入学者が主体で生徒数も増えることがなかったために、20年余りの1906年に閉じられ、CMS系の学校はすべて長崎からすがたを消している。

CMSによる長崎からの九州伝道の第一歩は鹿児島である。淡路島滞在中に入信の一信徒が帰郷後、モンドレルに鹿児島伝道を要請したことによるという。かれは神学生木庭孫彦を伴い鹿児島を訪れ、木庭を伝道師として派遣した。1879年のことである。この成果が今日の鹿児島復活教会である。第二の伝道地は佐賀で、最初期の神学生4名のうち3名が佐賀出身であったことで、モンドレルは佐賀に関心を抱いていた。1879年神学生洪恒太郎とともに佐賀を訪れて説教所を開設した。

熊本での本格的伝道は1890年にはじまった。神学校第一期生で熊本に赴任した洪は後年、「過去40有余年尤も伝道の困難なりしは熊本にして、屋上に石の飛来せぬ日とは殆ど稀なる位なり」と困難な伝道を述懐している。今日の熊本聖三一教会のスタートである。1887年ブランドラムが熊本に赴任<sup>9)</sup>、ここを本拠に延岡、宮崎、大分など九州東部の諸都市に伝道した。とくにこの年、イギリス国教会系の在日3団体が合同して日本聖公会が成立、組織上の整備が行われ、熊本が長崎に代わって九州地方中央となった。なお、熊本ではリデルが1890年この地にハンセン病患者が多いことから、宣教師を辞して私人として病院設立を計画、1895年回春病院を開設している。

福岡伝道は1881年以降佐賀から出張伝道が試みられ、1888年ハッチンソンが定住宣教師として着任し、今日の福岡教会の基礎を築くとともに久留米、大牟田伝道に着手する。1909年九州地方会主教に任じられたリーは、翌年熊本から福岡に主教座教会を移している。また、CMSで興味あることは、ほとんどの伝道地が都市部であるのに対し、地方からの要請を受けて福岡県の農村部で数ヶ所伝道を試みていることであるが、今日ではそのすべてが消滅している。

松平惟太郎『日本聖公会百年史』同会教務院文書局 1959

『日本聖公会九州教区史』同教区 1980

『長崎聖公会略史』『同続篇』長崎聖三一教会 1971, 1981

『熊本聖三一教会百年史』同教会 1979

『日本聖公会鹿児島復活教会百年史』同教会 1979

『日本聖公会福岡教会百年史』同教会 1989

『福岡城東橋教会百五周年記念誌』日本基督教団同教会 1996

『延岡聖ステパノ教会百年史』同教会 刊行年不明

国武詰生「聖公会筑後小山田会衆と竹尾越秣場争論」(『久留米郷土研究会誌』8, 1979)

ボイド (吉川明希訳) 『ハンバ・リデル』日本経済新聞社 1995

(2) 改革派教会 (日本基督教会—日本基督教団)

フルベッキの後を継いだスタウトは、1872年禁教令撤廃が近いとの理由で広運館教師を辞し、自宅で聖書を主たる教科書とする夜間の英学塾を設けた。広運館生徒が多く入塾したという。夫人のエリザベスもこの年女子のための塾を開いた。このスタウト夫妻による私塾は、のちに東山学院、梅香崎女学校に発展することになる。

やがてこのスタウト塾生の中から、豊後中津出身の瀬川浅ら3名の受洗者が生まれた。スタウトは直ちにかれらに神学教育をはじめますが、残ったのは瀬川のみであった。1874年スタウトは私邸内の塾舎で行っていた日曜礼拝を一般市民に公開するため、居留地に隣接する所に土地を得て教会堂を新築した。その町名からのちに「梅ヶ崎教会」と呼ばれたこの教会で、スタウトと瀬川は積極的な伝道活動を開始する。1876年さらに受洗者をえて10名の成人会員と2名の幼児により、長崎日本基督公会が組織され、瀬川が仮牧師に任じられた。今日の日本基督教団長崎教会の前身である。

この教会にはさらに留川一路、平山武知が加わり、「スタウト三羽鳥」と称された。スタウトは瀬川と留川を東京の一致神学校で神学教育を受けさせたのち、瀬川とともに「長崎神学校」を設立する。東山学院創設後はこの神学部となるが、1897年明治学院神学部に併合され長崎の地をはなれる。

スタウト夫妻の私塾は細々と続けられていた。1886年学校創設の任を携えてオルトマンズが着任したことで、この私塾は大きく発展、東山学院、梅香崎女学校の名で再出発した。しかし、前者は1932年に明治学院と併合、後者は1914年に山口光城女学校と合併し下関に梅光女学院として、ともに長崎の地を去った。

長崎をステーションとする改革派の九州伝道の最初は、CMSと同じ鹿児島であった。スタウトは瀬川と留川を派遣して調査させ、直ちに瀬川が赴任し1881年鹿児島教会が組織された。今日の日本基督教団鹿児島教会である。

改革派教会と長老派教会が合同して成立した日本基督一致教会の「西部中会」(1885年に「鎮西中会」と改称)がこの年長崎で組織され、長崎、鹿児島、柳川の3教会が加入する。ついで、村田若狭の関係で佐賀伝道が開始され、留川が担当した。さらに松浦(唐津)教会が組織された。福岡伝道は1893年、熊本伝道は1896年に開始されている。

山本秀煌『日本基督教会史』改革社 1929, 1973 (復刻版)

日本基督教会柳川教会編『日本基督教会鎮西中会記録』新教出版社 1980

レーマン (峠口新訳) 『ヘンリー・スタウトの生涯』同上 1986

『主のかいなにいだかれて』日本基督教団鹿児島教会 1981

『日本基督教団熊本坪井教会独立五十周年記念誌』同教会 1958

『創立百周年記念佐賀教会史』日本基督教団佐賀教会 1980

『唐津教会80年』日本基督教団唐津教会 1970

『日本基督教団福岡城南教会史』同教会 1973

『福岡渡辺通教会開設百年史』日本基督教団福岡渡辺通教会 1994

井川直衛編『東山学院五拾年史』同学院 1933

黒木五郎編『梅光女学院史』同女学院 1934

### (3) メソジスト教会（日本基督教団）

禁教令撤廃直後に長崎着任のメソジスト監督教会宣教師デヴィソンは、石見出身の禅僧から日本語を学ぶ。この禅僧飛鳥賢次郎がかれの初穂であり、のちに牧師としてかれの片腕となり九州伝道、とくに鹿児島、熊本での教会設立に尽力した。福岡にも来任、福岡女学院創設期に大きな貢献をしている。

1876年デヴィソンは出島に教会堂を新築、出島美以教会と呼ばれた。これが今日の日本基督教団長崎銀屋町教会へと発展することになる。かれは出島教会を本拠に長崎市内はもとより九州各地へと本格的な伝道を開始する。その足跡は九州のほとんどの都市におよんだといわれている。

さらに、かれは伝道方策上キリスト教主義学校設立の必要性を痛感し、教育専門宣教師派遣を外国伝道局に要請する。これに応じてラッセルとギールが1877年長崎に着任、早速生徒募集をはじめて開校した。今日の活水学院である。翌年ロングが来崎、加伯利英和学校を設立した。加伯利とは学校設立基金の最初の寄付者カブリ夫人の名であり、のちに鎮西学院と改称された。

神学教育に関していえば、デヴィソンおよびロングによる私的神学クラスは、加伯利学校設立により統合され、のちに鎮西学院神学部となった。しかし、1907年廃部となり、関西学院神学部に併合、長崎をはなれた。今ひとつユニークなのは活水女学校で、1887年に神学部を開設、主に婦人宣教師を補佐する伝道師養成を実施した。これもまた、志願者不足と教授陣手薄のゆえに1923年横浜の聖經女学校と合併して日本女子神学校を設立、長崎からすがたを消すことになった。

デヴィソンの使命は長崎にステーションを設け、九州全域への伝道を担当することにあつた。本格的九州伝道の最初は、1878年かれが長崎から飛鳥を派遣した鹿児島である。1883年には鹿児島を谷川素雅に委ね、ロングと飛鳥は熊本伝道に当る。福岡には1884年ロングと谷川が伝道開始、翌年活水のギールが来福し教会隣接地に福岡英和女学校（現福岡女学院）を創設した。1888年には熊本から飛鳥が転じ、英和女学校によるキリスト教教育と相まって福岡における中心的プロテスタント教会に成長、現在の日本基督教団福岡中部教会に発展するのである。1890年のメソジスト教会記録には「我らは九州7県の首府その4ヶ所に於て伝道事業を設立せり」と記されている。

大分地方においては、上述のメソジスト監督教会（美以教会）とは別の南部メソジスト監督教会（南美以教会）が伝道している。デヴィソンが大分に巡回伝道で訪れた所、当時の大分中学校長がかれに外人教師推薦を依頼、神戸の南美以宣教師ランバスと相談しウォータースが大分に派遣された。1888年のことである。ウォータースに続くウェンライトが聖書研究を中心に伝道に従事、これが今日の日本基督教団大分教会に発展する。大分、北九州のメソジスト教会は南美以系の教会である。

関係文献であるが、管見ではいわゆる『日本メソジスト教会史』ましてや『九州メソジスト史』のごときは見当たらない。

中村金次・竹林拙三『南美宣教五十年史』南美宣教五十年記念運動事務所 1936



- 鮫島盛隆『C.S. ロング日本宣教記』キリスト新聞社 1974  
 『長崎銀屋町教会百年史・第1部』日本基督教団同教会 1999  
 『恵みのみ手に支えられて—鹿児島加治屋町教会史』日本基督教団同教会 1990  
 『熊本白川教会百年史』日本基督教団同教会 1985  
 『福岡中部教会百年史』日本基督教団同教会 1988  
 『大分教会の百年』日本基督教団大分教会 1988  
 『一世紀のバトン—中津教会100年史』日本基督教団同教会 1997  
 『鎮西学院百年史』同学院 1981  
 『活水学院百年史』同学院 1980  
 『福岡女学院百年史』同学院 1987

#### (4) 組合教会（日本基督教団）

組合教会に関しては、ここにおられる塩野教授がご専門なので簡単にのべよう。

組合教会と密接な関係をもつのは熊本バンドである。1871年創設の熊本洋学校教師ジェーンズの影響で、30余名の生徒が1876年熊本花岡山で「奉教趣意書」に署名し、キリスト教を日本にひろめる旨の盟約を結んだ。これが主たる原因で廃校となった洋学校からかれらは京都同志社に転じ、多くが伝道者の道を進んだ。ある者はやがて九州伝道にも従事することになる。かくて、組合派の九州伝道は上記教派と異なり、長崎をステーションとするものではない。

組合派による九州伝道は、1879年新島襄が洋学校出身でこの年同志社神学校を卒えた小崎弘道を伴い日向伝道を試みたのが最初である。宮崎で医療活動かたわら伝道していた一信徒が、伝道者派遣を要請したことに端を発している。新島はほどなく帰洛、小崎が高鍋を拠点に各地に伝道し1888年日向基督教会を組織した。

この日向伝道と平行して福岡でも伝道が開始された。「福岡の変」参加者で兵庫監獄に収監された者がキリスト教に接し、釈放後に福岡伝道を新島に依頼した。その結果、熊本バンド出身の不破唯次郎が来福、伝道に着手した。今日の日本基督教団福岡警固教会の発端である。熊本バンド発祥の地熊本での伝道は1885年辻密太郎により開始された。ほどなく「熊本英学校」「熊本女学校」が設立され、宣教師も加わり、さらには熊本バンド出身の海老名弾正も来任するなど、熊本が組合派の九州伝道のステーションとなるのである。

しかし、学校関係者と宣教師の間に不和が生じ、宣教師は熊本を去りステーションは閉鎖された。しかし、1897年藤原直信の着任をえて教会再建の基礎をかためた。今日の日本基督教団熊本草葉町教会である。明治末には福岡、熊本、久留米、長崎そして宮崎地方の諸教会が組合派に名を連ねている。

- 小崎弘道『日本組合基督教会史』同教会本部 1924  
 湯浅與三『基督にある自由を求めて—日本組合基督教会史』私家本 1958  
 塩野和夫『日本組合基督教会史序説』新教出版社 1995  
 『福岡警固教会八十年』日本基督教団同教会 1965  
 『福岡警固教会創立百十年記念誌』同教会 1996  
 『日本キリスト教団熊本草葉町教会百年史』同教会 1985  
 『日本基督教団長崎馬町教会創立百周年記念誌』同教会 2003

篠田一人監修『熊本バンドの研究』みすず書房 1965

(5) バプテスト教会

バプテスト派に関しても、西南学院大学は同派の創設でありご専門の方々がこの席に多くおられるゆえに、簡単にのべよう。

バプテスト派の本格的日本伝道は、1873年北部バプテスト宣教師が派遣されたことによる。しかし、九州と深い関係をもつのは南部バプテストであり、1889年来日のマッコラムとブランソンである。かれらはすでに伝道を開始していた北部バプテストとの伝道区域に関する協定で、1892年以降九州伝道に着手する。翌年門司に教会を組織、ついで小倉、若松、福岡にも伝道、宣教師が定住した福岡では1901年に教会を組織した。

福岡ではマッコラムが神学塾を開設し1907年には福岡神学校が発足するが、東京に日本バプテスト神学校創設により廃校となる。しかし、この神学校は1918年に分離され、その2年前にドージャーによって創設された西南学院の神学部を経て、今日の西南学院大学神学部に発展している。北九州小倉の西南女学院は1922年の創設である。

バプテスト派に関してとくに注目されるのは福岡都市圏における教会設立の多さである。戦前は1901年創立の福岡教会、そして西南学院創設にともない1922年に分離独立した西南学院教会の2教会のみであつが、戦後西南学院大学に神学部設置という事情もあり急成長を示している。福岡教会からは東福岡、鳥飼、平尾などの諸教会が、西南学院教会からは久留米、姪浜、粕屋などの諸教会が誕生、今日では子教会のみでなく孫教会すら育っており、福岡市とその周辺に30をこえる教会の設立をみている。

『日本バプテスト連盟史 1889-1959』同連盟 1959

『たえなるかな主の足音 教会組織100周年記念誌』日本バプテスト福岡基督教会 2001

『西南学院バプテスト教会八十年記念誌』同教会 2002

関谷定夫「福岡地区バプテスト教会略史」『西南学院大学神学部報』No.26, 1988

『神の恵み80年長崎バプテスト教会80年記念誌』同教会 1984

『西南学院七十年史』同学院 1986

『C. K. ドージャーの生涯 生誕100年記念』西南学院 1979

(6) ルーテル教会

ルーテル派の日本伝道は南部一致ルーテル教会から派遣されたシェラーとピーリーが、1893年佐賀に着任したことにはじまる。中学英語教師として佐賀に滞在していたかれらの友人が、関西学院転出の希望を伝えたために、シェラーがその後任に採用されたことが佐賀選択の主たる理由である。

かれらはその日本語教師で伝道者の体験を有する日本基督教会の山内量平の助けをえて、佐賀および周辺の町々に伝道する。かれらもまた、日本人伝道者育成の必要性を痛感し1896年神学塾を開始するが、のちに熊本進出にともない神学校を設立、「路帖神学校」の名で神学教育を継続する。

佐賀においては、シェラーが佐賀中学英語教師を勤め、ピーリーが英語夜学校を開設するなど市民へのキリスト教理解を試み、1898年日本最初のルーテル教会が組織され、山内が初代牧師に任じられた。この年熊本伝道が着手された。路帖神学校は九州学院創設により九州学院神学部となる。九州女学院創設は1926年のことである。

かくして、熊本が佐賀に代わるステーションとなり、久留米、福岡、大牟田、日田と九州各地で

教会を設立していく。山内が福岡から大阪へ、といった具合にルーテル派は次第に東上の傾向を示し、神学校も1925年東京に移転した。しかしながら、戦前のこの派の中心は依然九州であり、全国的規模での展開は戦後のことである。

『日本福音ルーテル教会記念史』(20年史) 同教会 1914

『日本福音ルーテル教会史』(60年史) 同教会 1954

『日本福音ルーテル教会百年史』同教会 2004

ピーリー(青山四郎訳)『日本伝道開始の記録』グローリア出版 1982

『日本福音ルーテル教会九州における伝道の歩み』同教会九州教区 1986

『宣教百年の歩み』日本福音ルーテル佐賀教会 1992

『宣教百年記念誌』日本福音ルーテル熊本教会 1998

『雲の柱火の柱 日本福音ルーテル久留米教会八十年史』同教会 1981

『博多ルーテル教会八十年史』日本福音ルーテル博多教会 1989

『日本ルーテル神学校五十年の歩み』同神学校 1959

『九州学院七十年史』同学院 1981

拙著『山内量平』中川書店 1993

## おわりに

私はこの発表の冒頭で、本研究プロジェクトが「九州におけるキリスト教の受容」と題されているが、「受容」の前提として当然「伝播」を必須とし、伝播あつての受容であることをのべた。そして、本発表では主として九州を舞台とした「伝播」、つまり九州にキリスト教が伝えられ伝道されたプロセスについて、キリシタン、カトリック、ハリストス正教会、プロテスタントに分って概観してきた。合わせて、それに関係する文献をすべて網羅したわけではないが、手許にあるそれらを中心に紹介してきた。

この「伝播」の問題であるが、どの教派であれまず宣教師が自らが生まれ育ちかつ身につけた欧米のキリスト教の「運び手」として来日、そのキリスト教を日本人に伝えている。いわば欧米キリスト教の「移植」といってよい。キリシタン時代そして幕末から明治初期にかけて、日本においてはまったく異質のキリスト教という宗教文化体系を、それと異なる宗教文化的土壌で育った日本人に伝えるという事業は、かなりの困難と障害に直面せざるを得なかったのである。

何よりも宣教師自身の日本語能力の課題があった。また、キリスト教的諸概念をいかなる日本語に翻訳するかという用語の問題も存した。キリシタン伝来初期にはかなりの仏教用語を借用し、幕末明治初期には中国で用いられていた漢語使用がみられた。さらには、日本の政治権力側の思想統制や既成宗教、とくに仏教の反キリスト教運動といった多くの困難と障害のあったことはしばしば語られるところである。

こうした障害を克服しつつ宣教師は伝道に励み、日本人改宗者の獲得に成功することになる。かれらは日本人改宗者を教育し自らの助手とし、さらには独立した伝道者として伝道に当らせた。このようなプロセスを経過しながら、やがては日本の各地にキリスト教会が数多く設立されてきているのである。この意味からすれば、各地に設立された教会は「伝播」のための機関であり、同時にそれは「受容」「土着化」(indigenization)の結果であるともいうことができるであろう。

かくして、ともかく九州には今日、カトリックでは300をこす小教区教会（巡回教会をふくむ）が存し<sup>⑧</sup>、プロテスタントでは日本基督教団が伝道所を合わせて130余の教会、日本バプテスト連盟115、ルーテル教会37、聖公会22など、900をこえる教会（伝道所）の数をみることができる<sup>⑨</sup>。その他、キリスト教系の保育所、幼稚園から小、中、高、大学といった教育機関、社会福祉施設、YMCA、YWCAのごとき社会教育機関が数多く設立されている。これらもキリスト教受容の一形態といえるであろう。

本研究プロジェクトの構成メンバーである先生方が、具体的にキリスト教受容のいかなる側面を取上げる予定であるのか、私には分からない。しかし、この拙い発表と紹介した文献が、何らかのかたちで先生方の向後の研究に参考になりうれば望外の喜びである。

ご清聴を心から感謝申し上げたい。

### 註

- ①『アーミシュの文化と社会』（ヨルダン社、1973）、『アーミシュ研究』（教文館、1977）など。
- ②「ハッターライト家族の構造と機能」（『西日本宗教学雑誌』11、1989）、「ハッターライトにおける宗教的社会化について」（『活水論文集』44、2001）、「ハッターライトにおける宗教と経済」（『活水論文集』45、2002）など。
- ③「メキシコにおけるメノニータス」（『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究』Ⅱ、九大文学部、1983）、「メノニータスにみられる社会化について」（『同上』Ⅲ、1985）、「メノニータス文化の構造」（『同上』Ⅵ、1987）など。
- ④「一コミュナル・セクトにおける社会化について」（『哲学年報』43、1984）、「セクト児童の研究」（『西日本宗教学雑誌』7、1985）、「エスニック・セクトにおける学校教育」（『九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設紀要』49、1997）など。
- ⑤「生月のかくれキリシタン研究」（『哲学年報』49、1990）
- ⑥「宗教信仰と都市化—三井楽カトリックをめぐって」（『同上』45、1986）
- ⑦筆者編『九州の新宗教運動の比較研究』（九州大学文学部、1992）  
     〃 『西日本の新宗教運動の比較研究』（同上、1996）
- ⑧「福岡キリスト教略史」（『活水論文集』43、2000）、「明治期長崎におけるキリスト教・カトリシズム」（『同上』46、2003）、「明治期長崎におけるキリスト教・プロテスタンティズム(1)(2)」（『同上』47、2004、48、2005）
- ⑨比屋根安定『日本基督教史』1—4頁
- ⑩拙稿「福岡キリスト教略史」参照のこと。
- ⑪The Complete Journal of Townsend Harris, New York, 1930（『日本滞在記』（坂田精一訳）下。岩波書店、1954、2004、67頁）
- ⑫『宗教研究』（第71巻第3輯、1997年）所収の拙稿は、宮崎の『カクレキリシタンの信仰世界』（東京大学出版会、1996）の書評論文である。
- ⑬この項に関しては、人吉ハリストス正教会及川信神父に多くのご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。
- ⑭研究会の席上ではやや詳細にわたってのべたが、すでに『活水論文集』47・48集に執筆した内容と重複するところがあるため、本稿では簡要にのべるにとどめたい。
- ⑮ウィリアムス、1862年1月10日付書簡（元田作之進『日本基督教の黎明』64頁）
- ⑯ウィリアムス、1864年1月日付不明書簡（元田前掲書、71頁）
- ⑰ブランドラムは熊本在任中、第五高等学校キリスト教青年会（花陵会）の会館建設にあたり、多額の私財を寄付している（『五高・熊大キリスト者の青春・花陵会100年史』熊本大学YMCA花陵会、1996、16頁）

⑱『カトペディア』(2004年度版)カトリック中央協議会 2004

⑲『キリスト教年鑑』(2005年度版)キリスト新聞社 2005

〔付記〕

本稿は今年(2005年)9月3日西南学院大学で開催の「九州におけるキリスト教の受容」をテーマに組織された研究プロジェクト(代表者西南学院大学塩野和夫教授)の、第1回研究会で発表した草稿に若干加筆したものである。

(2006年1月31日受理)